

## 断 章

松 島 欣 哉

私は物心ついて此の方、言葉を発して後自分の思いが十分表現できていないとどこかしく感じたり、他者に私の真意をわかってもらえない、という経験を何度となく持った。それに伴い、私には言葉により私が他者から二重に隔てられているという感覚が募って来た。そのような折、某新聞のコラム欄で、堀口大學が鬼箱に入る数年前に、「このごろ漸く日本語が自由に使えるようになった」と言った、と書いてあるのを読み、私は堀口大學ですら（卑下して言ったことであろうが）90歳前後になるまで言葉を自由に操れなかったことに溜息を吐いた。と同時に、言葉は道具として人間の外にあるのだろうかという疑念も湧いたのだった。

丸山圭三郎氏を通して私が理解するソシュールによれば、彼は人間の心に言葉になる以前の思考や概念が確固たる実体として存在し、それを写すのが言葉である、という言葉＝名称目録説を否定し、人間は言

葉＝言語的記号により、言葉になる以前の無定形の思念・意識を分節し現実を切り取っていると言う。換言すれば、ラングという関係性の網により掬い上げられたものが言説（つまり、話された言葉、書かれた言葉）となって顕在化するということである。

もしそうであれば（私はソシュールの説を受け入れる者であるが）、人間の存在が主であり、言葉は従（道具）であるとする一般概念は怪しくなってくる。この点をマルチン・ハイディガーは、「本来、語るのは言葉であって、人間ではない」（『ヒューマニズム書簡』）と看破している。

私は外国語の勉強を始めて20年近くになるが、益々言葉の重圧がひどくなる。日本語というラングによって切り取って来た現実世界を、英語という別のラングにより再布置化する時、日本語が助けとなり且つ障害となるのである。現在の私には、言葉により磔刑にされた人間の姿が眼前に浮かんでならない。